AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学学術情報センターだより 第 47 号

満洲語の文献を求めて

竹越　孝

私の専門は中国語の文法史だが、最近は清代の満洲語文献を調査し、現存するテキストを読み解くとともに、校訂・注釈を加えた上で公表するという仕事が大きなウェイトを占めるようになった。30 代の中頃に、中国語の文法史をアルタイ諸語との接触という観点から再構築する、少なくともそのための土台作りをする、というのをライフワークに定め、最初の 10 年間を朝鮮語文献、次の 10 年間を満洲語文献、最後の 10 年間をモンゴル語文献、という具合に計画を立ててやってきたのだが、現在はその第 2 期といったところ。朝鮮語文献とモンゴル語文献に比べて、満洲語文献は圧倒的に先行研究が少ないため、調査の過程でこれまで知られていなかった資料が次々に見つかり、新たな鉱脈に突き当たったという感触を持っている。

もともと頭で考えるよりは手を動かすのが好きな性質なので、古い文献の調査は最も得意とするところで、日本の主だった漢籍関係の図書館ならほぼ行ったことがあると自負している。中でもホームと言える存在は、大学院生の頃にアルバイトをしていた東京・駒込の東洋文庫で、世界の五大東洋学研究図書館の一つに数えられるここの書庫に自由に出入りできたことが、自分の一生を決めたような気がする。これまでの図書館めぐりの中では、皇居の中にある宮内庁書陵部にパスパ文字（チベット文字を元に作られたモンゴル時代の公用文字）の文献を調べに行った時、トイレに立って手を洗った後、殺菌用の装置に一定時間手を入れてからでないと再度の閲覧が許されず、しかもその過程をじーっと職員が見張っているのでとても落ち着かなかったこと、また加賀前田家の旧蔵書を収めた尊経閣文庫では、初めて行った時に老齢の司書から漢籍の扱い方がなっていないと怒られ、その後見習いの丁稚のように本の持ち方、めくり方、サイズの測り方などを一つずつ指導してもらったことなどが記憶に残っている。

科学研究費を取るようになってからは海外の図書館にも足を伸ばすようになり、2010 年と 2011 年には韓国のソウル大学奎章閣、2012 年には台湾の故宮博物院図書文献館と台湾大学図書館、

ソウル大学奎章閣

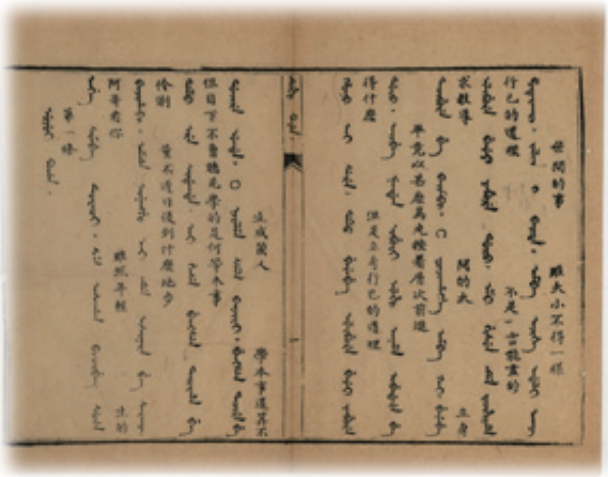
ハーバード燕京図書館

2013 年には大英図書館、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院、フランス国立図書館、2014 年にはカリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館、2016 年にはハーバード大学燕京図書館といったところで文献調査を重ねてきた。特に欧米の図書館に行き始めてからは、自分がこれまでアジアの感覚でしか世界を捉えていなかったことが実感され、格段に視野が広がった気がする。なお、中国の大学図書館や公共図書館は貴重書の閲覧を部外者に許可していないケースが多く、また図書館によってはかなり高額の閲覧料や複写料を請求されるので、今のところはその予定がない。

私がいま調査対象としている主な文献は、清代に刊行された満洲語と中国語の対訳会話教科書群である。中国東北の一部族に過ぎなかった満洲族は、約 300 年続いた明王朝の瓦解に乗じて山海関を越え、1644 年に国都を北京に定めると本格的な中国支配を開始する。そもそも全人口の 1 パーセントにも満たない満洲族が支配者の側に立つというのが無理のある構図だったこともあるが、皇帝の親衛隊として北京城内に住むことになった満洲人たちはあっという間に自らの母語を忘れ、中国語での生活にシフトするとともに漢文化にどっぷり染まっていく。清朝の歴代皇帝はその状況を嘆き、彼らに向けてたびたび満洲語の学習に励むよう勅令を発するとともに、科挙での優遇措置まで取って満洲語を学ばせようとした。その結果、北京では満洲語の学習書が陸続と刊行されることになる。これらが中国語史の資料として重要なのは、対訳の中国語が非常に口語的で、清代の北京口語を忠実に反映しているからである。

我々が学んで来た国語や英語の教科書では無味乾燥な文章が多かったが、こうした満洲語の会話教科書類は内容がめっぽう面白い。ごく真面目な人生訓や満洲語の学習に関する話題に混じって、時折訪ねてきては日がな一日おしゃべりに興じ、決まって二度のご飯を食べていく厚かましい男の話、夜中に幽霊が現れたと思ったら白衣に変装した泥棒だったという話、最近の女性は風紀が乱れているといいながら鼻の下を伸ばしている男が友人にたしなめられる話など、風変わりなエピソードのオンパレードである。なぜこういう内容が教科書になるのだろうかと深く考え込んでしまうが、そこには確かに北京城内に暮らす生活者たちの息遣いが感じられる。

書物の外形が実態を反映することもある。稀代の名君だった乾隆帝（在位 1736-95 年）が、満洲人の務めを「国語騎射」、つまり満洲語の学習と弓術の訓練とした通り、例えば『清話問答四十条』（1758 年）という満洲語教科書は『射的説』という弓術指南書と同じ帙に入っている。これが



清話問答四十条

表の顔だとすると、『清文啓蒙』（1730 年）のあるバージョンでは、同じ帙に『戒賭十則』という本が入っていて、その中には賭博の弊害が延々と書き連ねられている。裏を返せば、太平の世が続き無聊に苦しんだ満洲人たちの間で、当時賭博がいかに蔓延していたかを如実に物語るものである。

大英図書館

調査で複写や画像を仕入れてきた文献を対象に、満洲語をローマ字に転写し、辞書・文法書を引きながら一つ一つ意味を確定していくとともに、複数のテキストを細かく突き合わせてその異同を注記していく。そんな辛気臭い作業を続けられるのは、薄暗い書庫の片隅に埋もれ、声なき声を上げているこうした文献を一つでも多く世に出してやりたいという思いからである。そのためには、大学の仕事が忙しくて時間がないなんて言っていられないのである。

（たけこし　たかし
中国学科教授・外国学研究所所長）

秋の図書館イベント

第 7 回学生選書ツアーを開催しました

10 月 18 日（水曜）の午後、丸善ジュンク堂書店三宮店にて第 7 回学生選書ツアーを開催しました。今年は 4 名の参加者が 96 冊の本を選んでくれました。学生イベントの多い秋の開催ということで参加者不足が懸念されていましたが、さすがに読書の秋。本好きの学生さんが集まってくれました。また男子学生の参加者が過半数を超えた、ということも今年の特筆すべきことでしょう。

選書された分野は 4 名の参加者の個性が表れています。これまで外大図書館ではあまり所蔵していなかった分野もたくさん選んでいただきました。12 月 6 日（水曜）には図書館センター長を囲んで、POP 作成＆茶話会を催す予定です。12 月中旬には、その時に作成していただいた POP と選書本を併せて展示します。外大生が外大生のために選んだ本、ぜひお手に取って読んでみてください。どうぞお楽しみに！

（須浦）

第 10 回ラーニングアドバイザートークイベント開催報告

金子　奨平

2017 年 10 月 26 日、図書館内ラーニングコモンズにてトークイベントを開催させていただきました。今回は『**Language　learning　or Research ～言語を学ばないと卒論がかけないぞ？～**』をテーマに、「大学で語学力をあげること」と「大学で研究をすること」との関係性について参加者の皆さんと楽しく議論させていただくことができました。拙文ではございますが、以下でその内容を紹介させていただきたく思います。

“ 大学 ” といえば、「研究をする場所」という風に一般的に認識されますが、一方で外大生の中には「研究というより実用的な語学力をあげたいんだ」というモチベーションで通われる方も多い印象を持ちます。そこで今回は “Language learning” と “Research” という二つの柱の下、「大学で学ぶべきこと」について皆さんと議論していきました。

まず前半は「言語学習について」と題して、大学での言語学習の方法について皆さんの実践学習法や苦労話を共有する事で議論を進めていきました。「質問 1：皆さんはどのような方法で学習されていますか？質問 2：語学学習でどんなことに苦労されていますか？」という質問を皮切りに議論がある程度進んだところで、私なりの言語学習 7 基本というものを提示し、それらを踏まえたうえで、「Reading/Listening/Speaking/Writing 力が高いということはどういうことか？を考えてみてください。その定義を元にどういう学習をしたらよいか？を考えてみてください」という質問に移りました。以下にその 7 基本を参考までに提示します。

1.　頻度 (繰り返すこと)/2.　情意フィルター (プレッシャーを低くすること)/3.　i ＋ 1(少しだけ上のレベルの学習をすること)/4.　モティベーション (目的意識をもつこと)/5.　4 技能 (4 つの領域を組み合わせること)/6.　暗示的学習 (無意識の学習を大切にすること)/7.　メタ認知 (客観的に自分の能力を把握すること)

議論に際して参加者の方々からは、「Reading 力が高い人は、読む速さと正確さの両方が秀でているが、それを身につけるための学習法は？」といった質問をいただいたり「Speaking 力が高い人は語彙が豊富なだけでなく、非言語の扱いがうまいから、そういった面も “ 学習 ” していく必要がある」というような鋭いご指摘をいただいたりもしました。4 技能を満遍なく鍛えることは、日本という限定的な言語環境においてはなかなか難しく、特に話す・聞くという音声要素が入ってくる技能を留学なしで鍛えるのは難しそうな印象でした。字数の関係上、詳細をお伝えすることはできませんが、イベントを通して皆さんにお伝えした 4 技能それぞれのトレーニング方法を以下に示しておきます。

Reading: 音読 , 多読 , サイトトランスレーション , トップダウン / ボトムアップアプローチ
Listening: 音読 , シャドーイング , 発音練習 , トップダウン / ボトムアップアプローチ
Writing: コーパスや google を利用 , ジャンル別ディスコース分析 , シソーラスの使い方 , 添削のしてもらい方 , ＳＮＳや chat, 要約トレーニング
Speaking: シャドーイング , パターンプラクティス , プレゼンテーション , 音声分析 一人会話 , 通訳練習 , Ｓｉｒｉ

次に後半では研究のひとつとして「卒業論文」について、書き方のアドバイスや目的について議論していきました。ここでは前半で議論したことと卒論がどうつながっていくのかを皆さんと一緒に考えていきました。議論は次第に、『語学力を鍛えることが研究そしてその後の人生においてどのような影響を与えるのかについて』へと発展していきました。「語学力を鍛えることは、物事を見る目を変えることにもつながる」といったまさに language leaning と　research との関係性について自らの経験をもとに議論をしてくださる場面や、「研究のための語学力と純粋に生活していく上で必要な語学力の違いに悩んでいる」といった生の声を聞かせていただける場面にも遭遇できました。参加者の皆さんに一致していた意見として「言語を学ぶことは楽しいことだからいずれにしても自分の人生を豊かにしてくれる」といったものが印象的でした。

今回の企画は、卒業論文についてお話させていただく機会を図書館の方々からいただいたことに端を発します。ただ卒業論文の話だけをすると 4 年生のみの対象となってしまうので、「研究をしたくてこの大学に入ったわけではないのに・・・。もっと語学力自体を伸ばしていきたい・・・。」という周りの生の声きっかけに language learning と research(卒業論文) をミックスしてみることにいたしました。大学は研究機関であり、したがって外国語大学ともなれば、主眼は「外国の事物」を対象に研究を行うことにあります。そこが純粋に語学力を鍛える語学学校の違いだと私は考えています。しかしながらその研究を行うのに必要な語学力は、高校までの教育では決して身につかず、大学で補う必要があります。そこに大学としての語学力教育の意味があるのかなとも思います。AI が登場し、機械翻訳や機械通訳もどんどん性能が高まると同時に、グローバル化で外国語を当然のごとく操れる日本人が増えていく中で、これからの社会を生きていくために必要な外国語 " 能力 " にも変化が起きていくことも間違いありません。将来どんな道に進むにしろ、

「自分の長けている部分を生かして人のために生きていくために何が必要なのか」を皆さんと一緒に考えたかったというのがこの企画の本当の趣旨でもありました。私の運営能力不足で参加してくださった皆様にはご不便おかけした点も多くあるかと思います。その点、この場をお借りしてお詫び申し上げます。しかしながら同時に、それでもわざわざ時間を割き、参加してくださった皆さんと大変有意義な時間を過ごすことができ、私個人としては大変感謝しております。ありがとうございました。そして最後になりましたが、今回のお話をくださいました図書館職員および関係者の皆様にお礼を申し上げたく思います。本当にありがとうございました。益々の発展をお祈り申し上げます。

（かねこ　しょうへい　ラーニングアドバイザー）

図書館日誌　2017 年 7 月～ 2017 年 11 月

2017 年

6.3-7.31	展示「司書のおすすめ D」第 37 回
7.17-8.3	2017 年度第 2 回 Re ユース
7.23/30	試験期日曜開館 7 月のゼミガイダンス　5 回実施
8.6/20	オープンキャンパス（専攻言語の図書展示、司書による書庫見学ツアー）
8.21-28	蔵書点検 8 月のゼミガイダンス　1 回実施
10.2-11.25	展示「司書のおすすめ D」第 38 回
10.18	第 7 回選書ツアー
10.26	第 10 回 LA トークイベント 「Language learning or Research ～言語を学ばないと卒論がかけないぞ？～」 10 月のゼミガイダンス　2 回実施
11.7	トライやるウィーク（2 校 4 名受入） 11 月のゼミガイダンス　3 回実施

AD ALTIORA SEMPER 神戸市外国語大学学術情報センターだより
第 47 号　ISSN　0919-2336
「AD ALTIORA SEMPER」とはラテン語で「常により高きを求めて」という意味です
編集・発行：神戸市外国語大学学術情報センター
〒 651-2187 神戸市西区学園東町 9 丁目 1
TEL：078-794-8151 / FAX：078-797-2257
URL：http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/
2017 年 11 月 30 日発行　発行責任者：センター長　岡本崇男